

人間像

北海道

北海道最長の同人誌

小誌「人間像」は一九四九年九月二十日（昭和二十四年）に、故針山和美が立ち上げた同人雑誌である。最初は「路苑」という活版刷りだったが、資金難からガリ版の「道」とし、再び活版刷りの「人間像」としたのが一九五一年からだ。彼は、文章倶楽部、文学集団、文芸首都などの投稿誌の主だった書き手たちに手当たり次第手紙を書いた。これが意外な効果をもたらし、それぞれの個性的な書き手たちが同人となった。さらに、その同人たちが親しい物書きの卵たち呼びかけ、鼠算的に同人を増やしていった。書きたいことが山ほどあるという連中が集まり、全盛期には三十名ほどになった。しかも、北海道に根を下ろしつつ、ローカル誌というにはほど遠い特異な雰囲気のある雑誌となった。同人は四国・九州・大阪・東京・北海道と全国にまたが、北海道を本部とし、関東支部、関西支部を設け、三地区で合評会を持ち、内報「同人通信」へ集約した。この内報も三百号に達する。今、読み返してみると、かなり厳しい批評合戦だった。三地区に分かれていたため、対抗意識もあっただろう。合評についていけないとして、退

会する者も多かった。やがて、出版社も小誌を注目するようになり、朽木寒三、平木國夫、津田さち子らもプロとして多くの著作を上梓、丸本明子が著名詩人として名をなす。そのほか、古宇伸太郎、瀬田栄之助、千田三四郎も出版社からの呼びかけもあったが、すでにこの世から消え去った。

一七〇号を出した直後、主宰の針山が心筋梗塞で死去すると、予てから終刊を主張してきただけに、三分の二が退会。肝腎の終刊主張者である福島が、残った同人たちの懇願に負けて二代目の主宰を押し付けられた。現在、正規同人は四名である。発行経費の半分は私費を投じている私も卒寿。もうそろそろかな、と思っている。

（福島昭午）



同人は全国に跨がって

道内の伝統誌

人間像

文藝同人誌の現在 「人間像」(北広島市)

前身の「路苑」から数えると本年で68年、道内の同人誌の中では数分だけ存続だ。後述管内須賀町出身の作家、故針山和美が1949年、投稿雑誌で知り合った全国の作家に声を掛けて「路苑」を発行したのが始まり。そのため、創刊当初から同人が全国各地に存在していた。「道」(人間像)と名前を変えながら発行を続け、今年9月の最新号で177号を迎える。

ビック時の昭和40年代には、同人が30人以上、北海道のほか関東、関西支部もあり、各支部で合評会を開いていた。北海道新聞文学賞佳作の笠田三四郎のほか、大宅壮一賞候補のスペイン・イザベルを主眼眼を象徴した合巻も出した。針山が亡

ほっかいどう

「和して同ぜず」遠慮なく批評



くなったものの3年から主宰を務める福島昭午は、関東、関西支部の合評会は、オルグ(巡回)に行くと行って、激しく議論を交わしていたと振り返る。

福島は「編集方針の主なものは、読んでいないが、昔から『和して同ぜず』といった態度があった。仲間でも互いの作品への批評は遠慮がでず行なわれる」と語っている。

一方で、長年、道内文壇を文壇で活動する同人誌を運営するに動機もあつた。

これまでの「人間像」を比べ、歴史を振り返る主宰の福島昭午



針山の道論を研究する小樽の郷土史家野村保人が、道内から過去の「路苑」「道」「人間像」を預かり、インターネット上でアーカイブ(保存)記録する作業を進めている。一部を日英からネット上で公開する予定という。アドレスは<http://www.scribble.jp/> (文化庁 久米書)

▽北海道同人会(北広島市山手町1の10) 福島昭午 代表 011-372-1776 / 年1回刊、千円

「人間像」同人会

〒061-1148 北海道北広島市山手町1-1-10
 発行者 福島昭午
 TEL・FAX 011-372-1776